



新納忠元物語 四

伊佐市立菱刈郷土資料館 指導員 原田純一

島津軍の菱刈侵攻 中編

(菱刈・相良連合軍の反撃)

永禄十一年(1567年)

正月廿日、菱刈・相良連合軍(菱刈軍と略す)は、羽月の堂崎原に兵三千余りを出陣させ、島津軍の本陣馬越城の動きを窺った。これに対し、義弘は、僅か三百余りの兵を率いて、堂崎原に向かった。これに対し、菱刈軍は、相良の將、別府安芸守等に指揮させ優位に戦いを進めた。義弘軍は、苦戦に陥り防ぎながら、花北の飛田瀬まで退却した。この時、島津の將川上左近將監久朗と相良の將別府安芸守の一騎打ちが始まったが、勝敗は仲々決し難かった。こ

『朝鮮での泗川の戦い』と共に、『三大血戦』の一つとして語り継がれている。

同年二月廿八日、忠元は、市山城での戦略会議を終え、本陣に帰る武将を見送った後、小苗代薬師堂に参詣し板壁に「牡丹の花の下で眠っているかのような猫の本心は、花を求めて飛ぶ蝶を狙っているのだ」という詩を書いている

時、菱刈軍に不意に襲われ鎧疵を負い、市山城からの援軍に助けられやっと逃げかえた。この戦いは、『小苗代原薬師堂の戦い』と呼ばれている。

同年三月廿三日、入来院・

祁答院・東郷の渋谷一族が、宮原景種・佐多久政等が守る曾木城を攻撃。更に、市山の永福寺周辺まで侵攻し、新納忠元勢と交戦している。この曾木城攻撃に対抗して同年五月には、樺山忠助等の島津軍が菱刈軍への援軍を絶つため

祁答院氏の守る長野城(現在のさつま町永野)を攻略している。

同年八月には菱刈軍が、再度堂崎原に進軍し、島津軍の羽月城と曾木城の連携を塞ぐ作戦をとった。更に日向三之山(現在の小林市)の伊東勢が、飯野に侵攻した為、義弘はこれに対応するため飯野に帰った。菱刈軍は、此の隙を突いて、田中の重留川上流まで侵攻した。

長引く戦いに両軍は厭きて、島津日新斎(忠良)が、山野を相良氏に割譲する条件で和睦の提案をしたが、同年十二月十三日に忠良が没して、和睦は中断するが、永禄十二年(1569年)正月、いったん和睦が成立した。

☆次回は『島津軍の菱刈侵攻 後編』

(参考資料)

- ・旧記雑録後編一 167～230ページ
- ・旧記雑録拾遺 忠元勲功記
- ・大口郷土誌 上巻
- ・菱刈町郷土誌 改定版